大学キャンパスにおける大学生の主観的居場所体験と後期青年期人格発達の検討 －物理的環境との関連から－

A Consideration of University Students' Subjective Experiences in Places of Being on Campus and Personality Development during Late Adolescence: Relation to Physical Environments

岩井　律子 IWAI, Ritsuko

● 国際基督教大学高等臨床心理学研究所
Institute for Studies of Advanced Clinical Psychology, International Christian University

Keywords
物理的環境，主観的居場所体験，居場所，後期青年期，人格発達
physical environments, subjective experiences in the places of being, place of being, late adolescence, personality development

ABSTRACT

臨床心理学における居場所の実証的先行研究は，安心感，受容感からの理解が基本であったが，物理的環境の検討，また発達的な意味，複数の居場所の同時検討はされてこなかった。そこで本研究は，後期青年期の主観的居場所体験を自我と自己の側面から構造化すること，また物理的環境面を検討することを目的とした。大学生40名（うち31名が分析対象）が半構造化面接に参加し，大学キャンパスにおける3つの居場所とそこでの体験を語った。体験を分析したところ，13種類の居場所体験型が同定された。さらに人格機能による上位構造化を行い7種類のタイプを見いだし，それぞれを発達理論から論じた上で，後期青年期特有の居場所体験について考察した。また，個人の体験における物理的環境の関わりを検討したところ，各タイプ特有の関わり方が見いだされた。最後に，複数の居場所を描き出したことによる居場所の意味を論じた。

Previous empirical studies on "ibasho" (place of being) have focused on safety and acceptance. It has been assumed that late adolescents might have more than one ibasho and that physical environments might play

different roles in the different functions of ibasho. This study was, therefore, conducted to examine subjective experiences of ibasho, both physically and psychologically, especially in terms of psychodynamic personality development. Forty university students participated in semi-structured interviews. They were asked to mark three places on the campus map that they considered to be ibasho and freely discuss the reasons behind their decisions. Based on relevant episodes in the scripts of 31 students, 13 subjective ibasho experience patterns were conceptualized and constructed into seven ego-self functioning types. These were isolation avoidance (composed of isolation mitigation and isolation anxiety), self independence (withdrawal, self gnosis, and relaxation), supportive group-identity (half isolation, group identification and half isolation and half group), consolidated group identification (stable friend relationship), productivity (activity centered and study centered), self-ideal pursuits (self conflicts) and identity (ego-identification). The study identified ego-active ibashoes suggested for the first time, although the safety of groups proved as important as it had in previous studies. Discussions about these experience patterns and ego-self functioning types implied that ibasho and the possession of plural ibashoes were salient factors in the process of personality development during late adolescence.

1．問題

1．1　居場所研究の問題点

1980年代，不登校児童生徒の増加により，学校に代わる場所としてフリースクールが誕生した。フリースクールは，子どもの疎外感や孤独感を軽減し，安心していられる場所として大きな役割を果たした。このことをきっかけとして，不登校に限らず，人にとっての「居場所」の重要性が注目されるようになり（住田，2003a），「居場所」に関する研究も，1990年代から行われ始めた。当初，中心的役割を果たしたのは実践報告であったが（例えば，高橋，1994），その後，臨床理論的研究，数量的な研究が展開し，小学生から大学生まで，安心感，関係性，受容的環境等の感覚を中心に行われてきた。

心理臨床分野において初めに「居場所」について指摘したのは，北山（1993）である。北山（1993，2003）は治療室における患者の訴えを元に，Winnicott（1965）の環境論を用いて居場所論を展開した。以降のさまざまな実証的研究は，安心感や受容感といった共通のキーワードを見出してきた。

例えば，富永・北山（2003）は，居場所を「心の拠り所となる関係性，および，安心感があり，ありのままの自分が受容される場」と居場所としている。住田（2003a）は，居場所の客観的条件を「空間性－関係性」の2軸から整理した上で，居場所を「子どもが自分自身で解釈し，実感した自己受容感，自己肯定感，安心感，居心地のよさ，安らぎといった感覚的意味（主観的条件）を［関係性―空間性］という形で一体化された一部の客観的条件に付与することによって形成されるもの」としている（住田，2003a，p.8）。杉本・庄司（2006）は，居場所を「いつも生活している中で，特にいたいと感じる場所」と操作的に定義し，「居場所」の心理的機能に「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6因子構造を見いだした。則定（2008）は心理的側面に着目し，居場所を「心の拠り所となる関係性，および，安心感があり，ありのままの自分が受容される場」（p. 66）と定義し，心理的居場所感と重要な他者（父親・母親・親友）の存在を心理的居場所の前提条件としている。

これらは現代の居場所研究の重要な貢献であるが，3つの課題を残していると考えられる。まず，居場所の物理的環境の側面が検討されていない。居場所という環境の理解が，Winnicott的環境（富永・北山，2003）か，外的対人関係（則定，

2008）か，物理的な環境要件付加（住田，2003b）か，または「いたい」という願望（杉山・庄司，2006）かと研究により異なり，かつ物理的環境の議論は少ない。また，発達理論との関連した理解が十分検討されていないことである。最後に，個人は複数の物理的居場所を持つはずだが，それらの関係性について同時検討されていない。以下に，それらの問題について論じる。

１．２　物理的環境の意義

心理臨床や精神分析は精神内界のことを取り扱うことであり，外的な現実より内的現実が重視される。従って精神分析・精神医学領域において，人間と物理的な環境との関係はこれまであまり考察されてこなかった（Chawla, 1992）。古くの例外として，Searles（1960）が「ノンヒューマン環境論」として統合失調症者に対する豊富な治療経験を基に人間と外的環境世界の関わりについて論じた。彼は，意味付けという主観的体験が内在化されていくことにより，ノンヒューマン環境は意味を持つとした（Searles, 1960）。

Tuan（1977）もまた，「人間が生きている世界の基本的構成要素」（p.1）として場所と空間を論じ，外的現実として空間と場所は存在しているものの，人間は発達の過程で空間と場所を認識し組織立てられたものでもあるとした。つまり，空間と場所とは存在するものでありながら，人間が積み重ねてきた自身の体験や知識によって主観的に意味付けられ組織立てられたものでもあるのである。

これまでの居場所研究は，上述の個人の「意味付け」への注目に偏ってきた嫌いがある。それぞれの外的環境には個人固有の意味付けが生じるが，それにはその環境との関わり方にも個人特有のらしさが見いだされると考えられる。

１．３　居場所体験と人格発達

「居場所体験」には発達的意味があると考えられる。北山（2003）が理論化したのは，居場所が「抱える環境」（Winnicott, 1965）としての，母親的機能を持っていることである。それは，一生続くものではあるが，発達最早期の母子関係を起原としている。一方，身体性と勤勉性が発達課題である潜伏期の小学生は友達と運動場で遊んでいるときが学校場面においては最も居場所と捉えられやすく，仲間集団における同質性が中心となる思春期では，友達と一緒に教室で話しているときが最も選択されている（住田，2003b）。

則定（2008）の定義する心理的居場所に示唆される「誰かと一緒にいることで安心である」という心性は，初期青年期の仲間との同質性が重要な時期において自然なことである。元々，心理的居場所感尺度は則定（2006）が中学生を対象に行った研究を元にしており，この点に関し則定（2006, 2008）は十分に論じていない。

このように，潜伏期的，思春期的など，各発達段階によって居場所の特徴は異なり，それぞれの発達的な意味があることが，先行研究の結果から示唆される。

後期青年期的意味に関しては，後期青年期を対象に居場所とは何かについて，富永・北山（2003）及び杉山・庄司（2006）は予備的調査においてデータ収集をしているものの十分な検討がされておらず，発達時期特有の「居場所体験」の意味が不明確であると言えよう。そして，各発達段階的な意味は一生必要とされる種類のものであると考えられる。

１．４　理論的基盤と居場所の定義

発達時期を考慮したそれぞれの「居場所体験」を明確化すべく自我・自己の働き方を捉えるのは有益である。北山（1993, 2003）の理論は，対象関係論的視点に基づいて自己の感覚を捉えたものと考えられる。

そのような自己の同一性の感覚は，「その全てを分析的ではなく，そのまま受け入れることができるとき，そこはかとない安心に加えて自分と世界に対する愛着を持つことができる。そこには自分が自分であることの実感に怖れが無くなり，自分が自分ではないものとの世界の間で区別されることへの安心感がある。」（小谷，2008，p.66）として体験される。

以上を踏まえて，本研究において，居場所とは，身体的現実と心理的現実により構成される空間であると定義する。身体的現実要件としては，対象物（人工物であれ，土地であれ，他者であれ）と自身の身体の一部または全てが接触している現実的環境の中で，その個人が五感を用いて身体がある場所とその上に広がる空間とを体験していることである。その体験を基盤として経験が重なり何らかの個人的な価値観をその場所に付与しており，その場所に個人が自らの身体を置くことによって自己の連続性や安全感，自己同一性が賦活されることを心理的現実要件とする。

１．５　研究目的

居場所を論じる上で物理的環境と個人の主観的体験の関係は，心理力動的な並びに発達理論的観点はこれまで見落とされてきた。試みとして，物理的環境（エリア）を限定しその中での「どこ」という特定化と内的体験の比較することとした。物理的制約を制限することで，より厳密な居場所体験比較が可能になると考える。

また，日常的な居場所体験を取り扱うことから，居場所の操作的定義を「週１回以上その場所を利用していること」とする。

大学キャンパスという限定的な環境における大学生個人の主観的居場所体験を比較分析することにより，居場所における後期青年期の青年の心的体験と物理的環境を自我と自己の働きから構造化することを本研究の目的とする。面接によって大学生に直接語ってもらうことで，個人の居場所体験とこれに関連した外的な事実や出来事，物理的環境などを関連づけて検討したい。また，精神分析的人格発達理論と関連づけて概念化された居場所体験を論じ，物理的環境の後期青年期における発達的意義について検討したい。

２．方法

２．１　面接対象者および調査方法

2012年11月に，ICUの学生を対象に半構造化面接を実施した。面接はICU心理学実験室で行われ，ICUの学部生40名（男性15名，女性25名）が参加した。平均年齢は20.5歳（*SD*=1.4）であった。うち，自宅生が６名，一人暮らしが７名，寮生が26名，その他が１名であった。

２．２　道具

（1）カラー印刷したキャンパスマップ（図１）

（2）フェイスシート

参加者の属性を検討するため，フェイスシート（年齢，性別，学年，専攻，サークル，居住形態（寮，一人暮らし，自宅，その他），通学所要時間）を作成した。

加えて，本調査には記録のためICレコーダーを利用した。

２．３　手続き

個人情報守秘の了解を得て，ICレコーダーに記録した。面接の平均時間は，26分23秒（14分35秒～41分02秒）であった。始めに，居場所の有無の確認（居場所がないと回答した学生には，なぜ居場所がないと感じるのかをインタビュー問うた）し，次に，大学構内の居場所について，カラー印刷したキャンパスマップから，「どこが自分の居場所だと思うか？」と問い，３か所を記入してもらい，それらを順位付けてもらった。さらに，なぜ，そこが居場所だと思うのか，続けてどういう気分になるのかを説明してもらった。また，自分の心の状態がどういうとき，そこに行きたいと思うか，どれぐらいその居場所で時間を過ごしているか（１日平均）を尋ねた。最後に，全体への感想を尋ね，フェイスシート記入を依頼し，謝礼を渡して面接を終了した。

３．結果

まず，40名のデータのうち，居場所がないと答えた１名と，居場所があると答えたものの３つ答えられなかった１名（２つ回答），また，居場所の操作的定義に当てはまらない回答が含まれる被験者７名を除いた計31名（*M*=20.4，*SD*=1.4）を分析対象とした。

図１　視覚刺激として利用した大学キャンパスマップ

３．１　居場所体験のカテゴリー化

面接全体を通しての特徴や文脈，発言の意味を直接理解するよう記録を通読した後，なぜ居場所だと思うのか，どのような気分なのかを抜き出し，その居場所の体験のカテゴリー化を行った（表1）。

各自が挙げた居場所での体験ごとに，その内容から居場所体験のパターンを暫定的に同定した。まず，外的な条件として，体験エピソードを，「一人でいる」「誰かといる」と，「どちらにも該当しない」，3つに大きく分けた。その上で，それぞれの外的条件内で，逐次，すでにある居場所のタイプに該当する場合はその居場所パターンを，該当するパターンがないか，別のパターンとして区別しておきたい場合には，新たに指標を付してパターンを加えていくという手順を繰り返した。最後に，全ケースの語りを暫定的な居場所タイプとしてまとめ，指標を再度対応させて同じ概念にまとまっているかを吟味し決定した。

その結果，「孤独回避型」，「孤独不安型」，「引きこもり型」「自己覚醒型」「リラックス型」「半孤独型」「集団同一視型」「半孤独半集団型」「仲間共存型」「活動中心型」「勉強中心型」「葛藤型」「自我同一視型」の13タイプが見出された。それぞれの定義と発言の具体例を表1に示した。

また，さらに，それぞれの居場所おける体験型を，どのように安全空間を体験しているか検討し，上位カテゴリーを作成した。「孤独緩和型」，「孤独不安型」は，外的対象とともにいることで成立している。即ち，一人でいること，孤独でいることを避けるための居場所であることから「孤独回避型」とした。一方，「引きこもり型」「自己覚醒型」「リラックス型」は，心理的バウンダリーを物理的バウンダリーと一致させ個人システムを閉鎖させて物理的に他者から距離をとって空間を作ることで自己の安全感を得ていることから，「自己独立型」とした。「半孤独型」「集団同一視型」「半孤独半集団型」は，特定の物理的環境に対し

表1　居場所体験型のカテゴリー化，定義及び具体例

優位型	目的	略	体験型	定義	具体例
自己	孤独回避型	A	孤独緩和型	他者との交流を求める居場所。孤独感を緩和するために行く。相手は見知った人であれば誰でもよい。	【旧D館】あんまり行く機会は多くないけど、行くと人に会えるかなって。そんなに（関係は）深くはないけど、誰かに会える。誰にも会わない日に、誰かしら会える。授業が全然かぶらなくて、全然誰ともしゃべらないとき行く。（1年生）
		B	孤独不安型	仲間と共に行く居場所。孤独になること、ひとりになることへの不安がある。	【大学本館前芝生エリア】ふらっと（行く）。安心する場所。たまたま（友達と）会ってしゃべるかと（言って行く）。居る時間も短いし、不定期。安心する場所だけど、一人でいると落ち着かない。開きすぎて。それなりに人（＝友人）がいなくちゃいけない。（2年生）
	自己独立型	C	引きこもり型	外界から自分を隔離して、心理的にも物理的にも一人で区切られたいための居場所。	【 寮】部屋に引きこもっている状態に近い。他の人と接する時はある程度緊張感がある。服装が違う。部屋は自分の空間。部屋に居るときは鍵とかかけておく。（部屋の）ドアを開いている人すごい。帰ってきたとき、他の人が居るときはそのまま入るのは罪悪感がある。すぐ鍵かけられない。締める頃合いを計る。１回荷物を置いて何か物取りに行って鍵を閉める。締めた後は落ち着きたい。 疲れている。とにかく帰りたい。みんなに会いたいっていうより引きこもりたい。（2年生）
		D	自己覚醒型	自然、人工物、環境と触れ、自己覚醒をはかる居場所。	【大学本館前芝生エリア】パッとキャンパスを思い浮かべたとき、バカ山＊の辺りから見渡す景色を思い出した。晴れていて、ぱーっと何も考えずにいられる気分になる。きれいだなあとか、割とどっちでもないというか、ちゃんと一人。外から乱されない。景色もきれい。気分がまぎれる。何かあってもリセットできる。（2年生）
		E	リラックス型	一人でリラックスする居場所。	【大学本館前の芝生エリア】あったかい時に、落ち着いて本を読めるところ。別に人と触れたくない。本を読む。居心地よいんだけど、寝たくない場所。気分がよい。中にいるより、外で読む方が心地よい。ねっころがることができる。（4年生）
	支持的集団同一視型	F	半孤独型	一人で過ごすために行く居場所だが、仲間がいるかもしれないという期待もある居場所。完全な一人ではないことが重要。	【学生食堂】寮生じゃない友達がいる。帰り道だから。２～３時間寄ったりする。窓側の丸テーブル。そこで、誰かが来る時もあるし、一人のことも。でも、完璧な一人じゃない。セクメ＊やコミッティー＊など（に会ったりする）。（1年生）
		G	集団同一視型	所属場所としての居場所。特定の仲間がいるだろうと思って、その場所に行くが、一人でも過ごせる居場所。	【部室】部室には、誰でもいつでも人がいる。所属している感じがある。団員の人がいる。１年生のころは、英語の人たちといたけど、今は一人で行動することも多い。何もなくても、部室には居れる。誰かいても、居なくてもよい。CD聞けるし。（2年生）
		H	半孤独半集団型	同じ施設の中で、一人になりたいとき、仲間といたいとき、自分の気分によって自由に行ったり来たりできることが安心できる居場所。	【寮】変な刺激ない。寝たい時は（自分の部屋で）寝れる。何もしたくないときは寝れる。一人じゃ淋しいなと思うと、すぐ絶対友達に会える。本当に自由。（2年生）
	安定的集団所属型	I	仲間共存型	仲間と一緒に居ながらも、自分がいると安心して実感できる居場所。	【寮】友達がいる。友達っていうか、わからないけど、友達が多い。人が、むしろいるところの方が居場所。他の子たちがいる。キッチン、居間やソーシャルルームで同じ学年の子たちとギャハギャハやってると落ち着く。自分の部屋より落ち着く。無理して合わせなくていい。思ったことを言えばいいから。（3年生）
自我	生産性型	J	活動中心型	活動を通して楽しさを共有する居場所。	【スポーツクラブハウス】 すごく切羽詰まっているとき行く。行くと晴れ晴れ。授業で会わない先輩、後輩に唯一会える場所。〇〇（個人競技スポーツ）すると気分転換。普段出来ない分、楽しい。居心地が良い。（3年生）
		K	勉強中心型	勉強に集中するための居場所。	【本館】 授業行く回数として、多い。学びたいことがある。課題がある。（4年生）
	理想追求型	L	理想葛藤型	なりたい自分像を目指し葛藤する居場所。	【新D館】（サークルのこと）個性が強い。オレはそこまでなれない。色々思うことはあるけれども、疲れてそうなとき、心配してくれる。一応自分の場所ある。そこにどっぷりつかりたいのかわからないけど、どっぷり、たぶんつかれている。マックスで楽しいか。やりがいある。歌うのも楽しい。疲れるのも事実。自分は副部長。部のポジションがあって、責任が重い。精神的に負担。犠牲にするっていったら、あれだけど、犠牲と言うか、出て行くものと、得られるもの、赤字。他に出来ることもあるのかなって。（2年生）
	アイデンティティ型	M	自我同一視型	自分が目指していることや自我同一性が、体験など物理的環境に同一視された居場所。	【理学館】私理系なんです。多分理系としての誇りある。理系の部分を捨てたくない。願望です。実際授業とっている。理系である自分？ずっと理系で育ってきた分理系の方が就職に有利ってイメージある。理系から文系に落としたと思われたくない。（2年生）

注）バカ山：大学本館前芝生広場の一部。
セクメ：英語教育プログラムのクラスメートのこと。
コミッティー：委員会のこと。

て集団同一視を付与しており，その集団同一視が安全感の源となっているといえよう。従って，この3カテゴリーは「支持的集団同一性型」とした。「活動中心型」「勉強型」は，その居場所における現実的な目的に集中していることから，「目的集中型」，一方理想や目指したいものを意識している「自我理想イメージ追求型」は，「目標集中型」とした。最後に，その場所そのものが自己同一性の一部となり自己の連続性にまで内在化され，自我同一性の一部となっている居場所での人格機能を「アイデンティティ型」とした。

更に上位次元として「自己優位」と「自我優位」に整理した。「孤独回避型」から「安定的集団同一性型」までは，自己の安全感を得るために物理的環境，仲間集団を必要としておりの関係性が主になっていることから「自己優位」とした。また，「生産性型」から「アイデンティティ型」までは「自我優位」と同定した。自己と環境の関わりではなく，自分の目的や目標，置かれた状況という現実を踏まえて自我が自らの個人内システムを運営していると考えられたからである。これまでの先行研究と同様に自己の感覚を中心に体験する自己優位型と，今回主観的居場所体験として抽出された自我の働きが優位である自我優位型に大別す

ることができた。

３．２　主観的居場所体験で見られた人格機能について

全体の居場所体験の傾向と，順位による居場所体験の傾向を検討するため，表３に居場所体験別，目的別，全体及び順位による人数と割合を示した。

全体の分類では，多くの先行研究（富永・北山，2003など）と同様に「安定的集団同一性型」が全体の中で最も多く，23.7%を占めた。また，次に多かったのは，「支持的集団同一性型」の20.4%であった。割合は低いものの，仲間関係が関わる「孤独回避型」は，5.4%あり，集団同一性に関わる体験が60.2%を占め，青年期発達における集団同一性課題の重要性（橋本，2006）を示唆した。その次に多かったのは，「自己独立型」で17.2%であり，ひとりでいることも居場所の重要なテーマになると考えられる。杉山・庄司（2006）の研究において，居たい場所として一人の居場所が最も多く挙げられており，先行研究との共通性が見られた。

順番別に見ても，仲間関係が関わる割合は高かった。活動主体のものは，１番目の居場所としては取りあげられていなかったものの，２番目（29.0%），３番目（12.9%）において見いだされた。

４．考察

４．１　主観的居場所体験のカテゴリー

各居場所機能型における自我と自己の働きの違いを，それぞれを発達論の観点から論じる。

（1）「孤独回避型」

このタイプのキーワードは，「ひとりでいられない」ことである。「孤独緩和型」では，一人でいることができず，見知った他者を探し，エネルギー交換をしたことによって安全感を得る。また，「孤独不安型」の人は，現実として自分の所属集団のメンバーとともにいることで心理的な安全感を維持する。共通するのは，自らの安全空間を保持できず，他者からのエネルギー備給を必要とすることである。初期青年期の集団同一性発達においては同質性が重要なテーマとなる（橋本，2006）。つまり，同じであることや現実に一緒にいることで高まる衝動や不安定性を抑圧すると言えよう。

このような居場所体験型から得られる安全感は，外的条件に依拠しており，北山（2003）が指摘した，あるかないか揺らいでいる本当の自分は，他者とともにいる環境（居場所）で支持されて居ることができると言えよう。これは，則定（2006，2008）が概念化した重要な他者といる時に感じる心理的居場所感に関わる部分と関連が深いと考え

表２　主観的居場所体験型と人格機能評価

人格機能評価	居場所体験型	居場所体験別								人格機能評価別							
		1番目の居場所		2番目の居場所		3番目の居場所		合計		1番目の居場所		2番目の居場所		3番目の居場所		合計	
孤立回避型	A	1	(3.2%)	0	(0.0%)	1	(3.2%)	2	(2.2%)	3	(9.7%)	0	(0.0%)	2	(6.5%)	5	(5.4%)
	B	2	(6.5%)	0	(0.0%)	1	(3.2%)	3	(3.2%)								
自己独立型	C	2	(9.7%)	3	(6.5%)	2	(0.0%)	5	(5.4%)	6	(19.4%)	5	(16.1%)	5	(16.1%)	16	(17.2%)
	D	3	(6.5%)	2	(9.7%)	0	(6.5%)	7	(7.5%)								
	E	1	(3.2%)	0	(0.0%)	3	(9.7%)	4	(4.3%)								
支持的集団同一性型	F	0	(0.0%)	2	(6.5%)	5	(16.1%)	7	(7.5%)	9	(29.0%)	5	(16.1%)	5	(16.1%)	19	(20.4%)
	G	1	(3.2%)	2	(6.5%)	0	(0.0%)	3	(3.2%)								
	H	8	(25.8%)	1	(3.2%)	0	(0.0%)	9	(9.7%)								
安定的集団同一性型	I	8	(25.8%)	8	(25.8%)	6	(19.4%)	22	(23.7%)	8	(25.8%)	8	(25.8%)	6	(19.4%)	22	(23.7%)
生産性型	J	0	(0.0%)	3	(9.7%)	1	(3.2%)	4	(4.3%)	0	(0.0%)	9	(29.0%)	4	(12.9%)	13	(14.0%)
	K	0	(0.0%)	6	(19.4%)	3	(9.7%)	9	(9.7%)								
理想追求型	L	3	(9.7%)	2	(6.5%)	6	(19.4%)	11	(11.8%)	3	(9.7%)	2	(6.5%)	6	(19.4%)	11	(11.8%)
アイデンティティ型	M	2	(6.5%)	2	(6.5%)	3	(9.7%)	7	(7.5%)	2	(6.5%)	2	(6.5%)	3	(9.7%)	7	(7.5%)
	合計	31	(100.0%)	31	(100.0%)	31	(100.0%)	93	(100.0%)	31	(100.0%)	31	(100.0%)	31	(100.0%)	93	(100.0%)

られる。

（2）「自己独立型」

第二の個体化のプロセスを経て，青年は愛情対象，理想の対象であった両親から離れ，超自我の内部に再編が起こる（Blos, 1967）。青年たちは自らの性衝動や身体，性別を受け入れなければならず，結果自分と自分の行いに責任を持たなければならなくなる（Jacobson, 1964）。青年たちは次第に超自我の指示にすぐ従うのではなく，まず現実をみて行動するようになり，選択の自由がより拡大していく。結果として，青年は「本能的な自由の感覚，対象選択の自由，そして，考え，感じ，行動する自由を獲得する」のである（Tyson & Tyson, 1990，邦訳 p.187）。青年たちは早期からの葛藤や権威による支配から離れるが，自らが主体的に自分を客観的に眺めて評価するようになる。そして，このためには自己を内省する空間を必要とすると思われる。自己独立型の体験は，「ひとりでいること」が共通しているが，その環境からどのようにひとりでいるか，どのような心性があるかは大きく異なっている。

（3）「支持的集団同一性型」

「半孤独型」では，自分を個として空間に身を置き，実存性を実感できるが，そこはかとなく所属集団を感じたい，感じることによって安全感を得ている。

「集団同一視型」では，ある特定の空間に自らが所属する集団を同一視していると言えよう。集団のメンバーが目の前にいなくても内在化されているため安全感は維持される。従って，その場所にメンバーが不在でもひとりでいることができる。

「半孤独半集団型」は，その時の気分に応じて一人と集団の間を行き来できる自由さから安全感を得ている。それは，ひとりの外には安心できる集団の居場所があるという信頼感である。

どの体験型も共通して，特定の空間（部室など）を基盤とした安心感に，ひとりになることができることが指摘できよう。青年期における集団同一性発達の過程で，青年は次第に誰かといなければ自らを実感できなかったのが，個人でいても集団でいても自らの独自性を獲得するが，このタイプはその訓練過程と考えられるのではないだろうか。

（4）「安定的集団同一性型」

後期青年期は，外的現実の影響や超自我，エスから独立して自律的に運営できる自我の自律性と強さにより，自由は確保され成人として社会で責任を負って生きていけるようになる（橋本，2006）。

安定した，柔軟な多重集団所属が可能になり，それぞれの集団に選択的に同一視することができ，社会的な集団へと集団同一性を拡大する。その結果として，個人は現実から自由になり，誰かといながらもひとりである（Winnicott, 1965）ことができるといえよう。他者が自分と異質であったとしても受け入れ，一方で自分は自分であるという感覚を失わない。安定した後期青年期特有の集団同一性の獲得し，自分の独自性を保ちつつ安心していられる居場所であろう。

（5）「生産性型」

この体験型は，自分の身体や知能，いわば自分が持つ資源を活用して現実に働きかけ自分らしさの実感を得る居場所である。「活動中心型」は，同じ活動をともにすることで，エネルギーを交換し楽しみを共有する体験型である。居場所として，活動する目的が中心にあり，これは潜伏期に獲得する勤勉性，何か自分から生み出す喜びと関連するのではないだろうか。「勉強中心型」は，大学本来の目的である勉強に集中する居場所である。

これまでは北山（1993, 2003）は“doing”ではなく，“being”の居場所に重きをおいてきたが，本結果では活動中心型，勉強中心型と，“doing”の居場所が語られた。フロイトが指摘した人間の根源的な能力の一つ，働くこと（小此木，1970）や勤勉性など，現実との関わりアクションを起こす，世界に影響を与え合うことで生まれる喜び，そのような居場所もまた個人にとって重要な意味があると考えられる。

（6）「理想追求型」

青年期は理想化された父親像や母親像はもはや幻想であることに気がつき（Tyson & Tyson,

1990），周囲に自分より優れた者がいる，もしくは自分の理想像を目指す居場所である。それは決して楽しいことだけではない。周囲の仲間，先輩，等々を見ながら新たな自分らしさを見いだそうとする場所である。

（7）「アイデンティティ型」

この居場所は，その居場所における主観的体験が意味を持ち自分らしさの一部となるものである。Searles（1960）は，ノンヒューマン環境を，根本的に人間と異なり絶対的な存在であるが故に，自我境界が揺らぐ統合失調症や，自分を失いがちな青年期の青年たちにとって大きく意味があることを指摘したが，このタイプは根本的に異なると考える。自分らしさとその場所の特殊性，または場所での個人の体験が積み重なり歴史性を生んでいる。その場所のもつ歴史的な意味や，またはその場所がもつ機能と自己の価値観を同一視すると過程できよう。

４．２　居場所における物理的環境の意義

以上のように，居場所体験のカテゴリー化を行ったが，各物理的環境の役割が主観的居場所体験ごとに異なることが指摘できる。

「孤独回避型」と「安定的集団同一性型」においては物理的環境は居場所の構成要素として取りあげられなかった。

一方，自己を調整するための手段として物理的環境を利用したのが，主に「自己独立型」であった。「引きこもり型」において，物理的な壁などに仕切られた空間，独立したい，隠れたいという役割を果たした。一方，「自己覚醒型」では，自然と自己を比べることで，両者の根本的な差，人間である自己と，非人間としての対象に出会うことで，自己の連続性を回復させている。これは，Searles（1960）が言う，物的環境の安定性に触れることで，自分と，安定している物的対象と根源的に異質であるということを再認識することで，曖昧になっている自己バウンダリーを際立たせる場所に該当すると思われる。ともに，曖昧なバウンダリーを外的な環境刺激を受けて覚醒させているのだが，根底にあるのは不安なり不安定性である。リラックス型は，「ひとりでいること」（Winnicott, 1965）を楽しむための居場所であろう。ひとりになることの意味は他の２つのタイプとは根本的に異なる。具体例に示した場所は大学本館前の芝生広場一帯であり，物理的な壁は存在しない。開放的な空間で，自らの身体を寝そべらせて物理的環境をひとりで楽しむ環境である。それは，健康的に本当の自己を解放する環境であると言えよう（北山，2003）。このタイプにおける物理的環境は，自分と根本的に異なる対象ではなく，親しむ対象である。

また，「支持的集団同一性型」では，物理的環境は，そこはかとない安心感をもたらしてくれる対象として内在化されていると言えよう。「あそこにいけば，友達がいるかもしれない」，「あそこに行けば仲間に会える」ことは人への期待であると同時に，その期待と場所は密接に関係している可能性が指摘できる。物理的環境は自己の味方であり母親的機能を持ちながらも，自分も状況やニーズと合わせて安心して関わる対象であるだろう。

一方，自我優位型の「生産性型」「理想追求型」「自我同一性型」において，前の二つは物理的環境があまり重要ではないが後期青年期発達課題である自我同一性に関わる際物理的環境が自我同一性と結びつくものも見いだされた。

北山（1993）は，居場所がないことは，現実的に場所がない，または自分の中身がないという二重性の意味があると指摘したが，物理的環境への関わり方は自分が揺らぐ時に頼りに自我同一性を獲得するに至って物理的環境との違いを認識しながら能動的に関わることができるようになるのかもしれない。

４．３　複数の居場所の意義

主観的居場所体験と，自我と自己の働き，ならびに複数の居場所を同時に検討したことで，本研究は先行研究と同様に安心感を基盤とした居場所とともに潜伏期的生産性や，自我が優位的に働く居場所も見いだした。

これは，同時に複数の居場所をもち，意識的で

あれ無意識的であれ自らのニーズをその環境で満たすよう求めて動く能動性である。時にはひとりになって自らを客観視し，時には仲間との安心する関係を楽しみ，時には自分自身に葛藤する，といった個人の心の力動的かつ自己充足的な力でもある。それは，自らが成長しようとする力（Rogers, 1942）をもつ後期青年期の青年たちの姿であろう。一つの居場所，安心感や他者存在の維持する居場所だけでは，自我同一性の発達課題は達成されない。複数の居場所で，それぞれ，ひとりになり，仲間集団とともにいて，悩み，楽しみ，という異なる体験を重ねることにより自ら自分らしさを見いだすものではないだろうか。

北山（1993，2003）の居場所理論は，自分の中身のなさ（精神病圏）や自分の中身に対する葛藤（神経症圏）に苦しむ患者の訴えに対する治療論を基盤としている。また，治療者が取り組むのは心の内側のことであり，なぜ内側のことのみに集中できるかは，そこが物理的にも時間的にも構造化され安定した空間であるからである（北山，2007）。これまでの居場所の実証研究では，治療室の物理的要件はあまり顧みられず，治療室内と同じように心の内側のことに焦点化したのではないだろうか。しかし，複数の居場所を描いたことにより，各居場所でのニーズも異なれば物理的環境との関わり方も異なることが示唆された。

この個人のニーズは，個々人の発達段階により異なることや，各自の発達段階によりどの居場所を選ぶかは異なると予測される。本研究では，複数の居場所における主観的体験を構造化することを目的としたため，この点はこれまでの先行研究では描かれていなかった居場所体験が抽出されたことによる示唆のみに留まる。今後の重要な検討課題である。

5．結論

人格発達理論から主観的居場所体験を分析したところ，母親的な環境（何も考えない，ひとりでいられる，活性化する），活動的な環境，仲間的環境，目標追求的環境が同定された。

個人として見た時，それらはどれも必要な環境と言えるだろう。

発達のありようによって個人差があり，特徴（偏り）もあると考えられる。

一方，個人として見た時，発達促進的に環境が機能している（目標追求など）場合もあれば，不安定な（と言っても，病理とは限らないが）自己感覚を支えるために環境（誰かいてくれる場所に行く等）が機能している場合もあると推測される。

本研究は主観的な居場所体験が物理的環境と結びついて，いくつかの種類があることを見いだしたが，今後は個人の発達の差により，どのような居場所体験型の特徴があるのか検討が必要である。

謝辞

本研究は，修士論文の一部を加筆修正したものである。修士論文をご指導くださった小谷英文元教授に篤く感謝致します。

引用文献

Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 162-186.

Chawala, L. (1992).Childhood place attachments. In I. Altman & S. Low (Eds.), *Place Attachment* (pp. 63-86). New York, NY: Plenum Press.

橋本和典（2006）. 男性の成熟性 ―集団同一性から自我同一性の成熟 小谷英文（編）*ニューサイコセラピー* 風行社 pp. 65–88.

Jacobson, E. (1964). *The Self and the Object World*. Madison, CT: International Universities Press.（伊藤洸（訳）*自己と対象の世界 ―アイデンティティの起原とその展開* 岩崎学術出版）

北山修（1993）. *自分と居場所* 岩崎学術出版社

北山修（2003）. 自分の居場所 ―精神分析理論と臨床 住田正樹・南博文（編）*子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在* 九州大学出版会 pp.21–37.

北山修（2007）. 劇的な精神分析入門 岩崎学術出版

小谷英文（2006）. *ニューサイコセラピー* 風行社

小谷英文（2008）. *ダイナミックコーチング* PAS心理学研究所

文部省中学校課（1992）. 登校拒否（不登校）問題について ―児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して（学校不適応対策調査研究協力会議報告）―. *教育委員会月報*, 44, 25–29.

則定百合子（2006）. 思春期における「こころの居場所」に関する研究. *神戸大学発達科学部研究紀要*, 13, 17–27.
則定百合子（2008）. 青年期における心理的居場所感の発達的変化. *カウンセリング研究*, 41, 64–72.
小此木啓吾（1971）. *現代精神分析II* 誠信書房
Rogers, C. R. (1942). *Counseling and Psychotherapy*. Boston, MA: Houghton Mifflin Company.
Searles, H. F. (1960). *The Nonhuman Environment*. New York. NY: International Universities Press.（殿村忠彦・笠原嘉（訳）（1988）. *ノンヒューマン環境論* みすず書房）
杉本希映・庄司一子（2006）.「居場所」の心理的機能の構造とその発達的変化の研究, *教育心理学研究*, 54, 289–299.
住田正樹（2003a）. 子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田正樹・南博文（編）*子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在* 九州大学出版会 pp.3–17.
住田正樹（2003b）.「居場所」のない子どもたち. 住田正樹・南博文（編）*子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在* 九州大学出版会 pp.169–201.
高橋哲夫（1994）. 学校が「心の居場所」であるために. *児童心理*, 6, 15–21.
富永幹人・北山修（2003）. 青年期と「居場所」. 住田正樹・南博文（編）*子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在*. 九州大学出版会 pp.381–400.
Tuan, Y. F. (1977). *Space and Place: The Perspective of Experience.* Minneapolis, MN: University Of Minnesota Press.（山本浩（訳）（1993）. *空間の経験―身体から都市へ* 筑摩書房）
Tyson, P., & Tyson, R. (1990). *Psychoanalytic Theories of Development: An Integration by Phyllis Tyson and Robert L. Tyson.* London: Yale University Press.（皆川邦直・山科満（監訳）（2008）*精神分析的発達論の統合* ② 岩崎学術出版社）
Winnicott, D., W. (1965). *The Maturational Processes and the Facilitating Environment by D. W. Winnicott*. London; The Hagarth Press Ltd.（牛島定信（訳（1977）. *情緒発達の精神分析論* 岩崎学術出版社